

独軍最後の西方攻勢を 挫いた米軍の奮闘

ドイツ第三帝国との戦争はほぼ終結した——
44年のクリスマス目前に米軍将兵たちはそう考えていた。
その間隙を突くかのように開始されたドイツ軍の一大攻勢。
厳冬の欧州で繰り広げられた米軍兵士たちの戦いを描く。



Battle of THE BULGE

文=山崎雅弘

アルデンヌ 1944

(上) M4シャーマン戦車の
支援の下で、要衝バストーニ
ュの防衛を行うアメリカ軍兵
士。(下) アルデンヌ攻勢で
進撃するドイツ軍のティーガ
ーII重戦車。



米軍はなぜ敵の奇襲を許したか

第二次世界大戦におけるドイツの敗色が濃厚となった一九四四年十二月十六日の早朝、霧と雪に覆われたベルギー南部のアルデンヌ高原の森で、突如として猛烈な砲声が鳴り響いた。その開始から一時間後、巨大なケーニヒス・ティーガー重戦車(ティーガーII型)を含むドイツ軍の戦車が木々の奥から出現し、完全に不意を打たれてパニックに陥ったアメリカ兵を蹴散らしながら、ベルギー領内の要港アントワープを目指して西の方角へと突進した。大戦中にドイツ軍が実行した、事実上最後の戦略的大攻勢「ラインの守り作戦」の始まりである。

深い森林に覆われたアルデンヌの米軍支配地域に張り出す形で、巨大な突出部(バルジ)を描いたその戦線形状から、後に「バルジの戦い」と称されることになるこの戦役は、最終的にはアメリカ軍側の勝利に終わった。だが、ヨーロッパに派遣された米軍の将官たちは誰一人として、このドイツ軍の大攻勢実施を予期していなかった。

一九四四年六月のノルマンディ上陸作戦以降、アメリカ陸軍は豊富な物資

と大量の輸送車両を駆使して北フランスからドイツ軍を駆逐し、米第8空軍の重爆撃機はドイツ本土の軍需工場や物資集積所を空から情け容赦なく破壊していた。その結果、米軍情報部は一九四四年末の段階で、ドイツ軍地上部隊はもはや、新たな大攻勢をアメリカ軍に対して実行できるだけの燃料も弾薬も保有していないとの事実認識に陥っていた。そして、鬱蒼とした森と峻険な峡谷が重なり合うアルデンヌの前線は、戦闘経験の無い新兵を薄く配置するだけでも十分に維持できると考えていた。

こうした状況認識の重大な誤認によって、アメリカ軍は序盤の敗北で多数の兵士を失い、戦車や火砲などの重装備をスクラップにし、戦場附近に備蓄していた膨大な燃料を灰と黒煙に変えてしまう結果となったのである。

それではなぜ、戦略的には圧倒的な優位に立っていたはずの米軍が、敵の奇襲攻撃を受けて一時的とはいえ戦局の主導権を敵に握られてしまったのか。そして、第二次大戦の期間中、軍事謀報の分野で数々の実績を挙げってきた米軍情報部は、どのような理由で敵の攻勢計画の探知に失敗したのだろうか。

アルデンヌの「幽霊戦線」

アルデンヌとその両翼の戦況

ノルマンディ地方での二か月にわたる熾烈な攻防戦で、人的・物的に限界まで消耗し切ったドイツ軍は、フランスの首都パリが連合軍の手で解放された一九四四年八月二十五日以降、北フランスに留まって抵抗する意図を捨て去り、ドイツ本国に向けて全力で退却する方策を選んでいった。それから二日後の九月十五日には、アーヘンからルクセンブルクに至るアルデンヌ地方の大部分が米軍の支配地域となり、三か月後の「バルジの戦い」が開始される時とさほど変わらない位置に、両軍の対峙する戦線が形成された。

この頃、連合軍最高司令部(SHAEF)は、左翼のオランダおよびベルギー北部と、右翼のアルザス・ロレーヌ地方という両翼のどちらかに攻勢主力を投入して、一気にドイツ領内への突入を図るという構想を立てていた。激しい議論の末、英軍の欧州派遣部隊(第21軍集団)司令官モントゴメリー大将の発案した、大規模な空挺降下を

伴うオランダ方面への突破侵攻計画「マーケット・ガーデン作戦」が採用されることとなった。

だが、米英連合軍の情報部は、空挺降下予定地の近郊で敵のビットリヒ大將率いる第2SS装甲軍団(第9SSおよび第10SSの二個装甲師団)が休養・再編中であるという重要な事実を見落としていた。このため九月十七日に開始された同作戦は、情報収集面での不手際と、それに起因する敵守備兵力の過小評価により、予想をはるかに上回る損害を出す結果に終わった。

連合軍の情報部は、主に「ウルトラ」と呼ばれるドイツ軍上級司令部間の暗号通信を解読した情報に依存して、敵軍の情勢や作戦意図などを探っていたが、このSS装甲軍団の休養に関する情報は「ウルトラ情報」に含まれていなかったのである。

この敗北により、連合軍首脳部は「一気にドイツ領内へ突入する」という野心的で性急な攻勢案を捨て、イギリス軍は要港アントワープ周辺地域の完全確保と、カレーなど英仏海峡に面した



西部戦線はバルジの戦いのほぼ直前の状態。東部戦線は11~12月のころを表す。東部戦線の人員は、独ソ両軍とも同盟国の人員を含めているが、ソ連軍はドイツ軍の約3倍の兵力を集結させていた。一方、西方への攻勢を計画したドイツは、米英連合軍以上の師団数を西部戦線に集結させたが、それすらも米英軍を完全に凌駕する兵力とは言い難かった。

おける燃料補給の優先順位がイギリス軍および米第1軍よりも下位に置かれていたため、作戦遂行中に燃料不足で停止する事態が相次ぎ、十一月になっても目立った成果を挙げられずにいた。十一月二十五日、ロレーヌの城塞都市メッツ(メス)をようやく制圧したものの、ドイツのザールラント地方とフランスのロレー

ヌ地方の国境を流れるザール河の対岸に橋頭堡を確保するという作戦目標は、いまだ達成できていなかった。

米陸軍情報部の失態

十二月に入ると、アーヘンとロレーヌ地方での米軍の作戦は、悪天候と補給物資の枯渇によって停止を余儀なくされた。パットンの第3軍は、十二月十九日を開始予定日とするザールラントへの新たな攻撃計画を立案したが、その実行に必要な燃料と弾薬の集積状況は決して順調とは言えず、血気盛んなパットンを苛立たせていた。

そして、アーヘンとロレーヌ地方の中間に広がるアルデンヌ地方は、九月中旬に米軍が占領してから約二か月の間、米独両軍とも積極的な活動を行うことなく対峙する状況が続いたため、いつしか米軍内では「幽霊戦線」と呼ばれるようになっていた。米軍はこの場所に、陸軍指定の「保養地」を二〇か所以上開設し、休暇中の米軍兵士はスポーツ施設や射撃場、映画館、みやげ物屋、温泉など各種の娯楽施設でひとときの愉しみを得ていた。

だが、その「幽霊戦線」の反対側では、ドイツ軍が大規模な攻勢作戦を実

港湾の占領を最優先とする局地的作戦に全力を注ぐ一方、アメリカ軍はアルデンヌ地方の両隣に位置するアーヘンとロレーヌ地方で、それぞれ米第1軍(ホッジス中将)と米第3軍(パットン中将)に限定的な攻勢作戦を実施させた。

アーヘン正面に対する米軍の攻撃は、十月二日に開始されたが、ドイツ軍は同市南方のヒュルトゲン森林で猛烈な

抵抗を行い、双方に甚大な死傷者を出す激戦が十一月下旬頃まで繰り広げられた。この戦いで大損害を被った米第4歩兵師団と第28歩兵師団は、再編と休養のため前線から引き抜かれ、比較的平穏なアルデンヌ地方の戦線へと送られた。

一方、パットン第3軍によるロレーヌ地方への攻撃は、九月十八日から段階的に進められたが、同軍は連合軍に

ス地方での米軍の作戦は、悪天候と補給物資の枯渇によって停止を余儀なくされた。パットンの第3軍は、十二月十九日を開始予定日とするザールラントへの新たな攻撃計画を立案したが、その実行に必要な燃料と弾薬の集積状況は決して順調とは言えず、血気盛んなパットンを苛立たせていた。

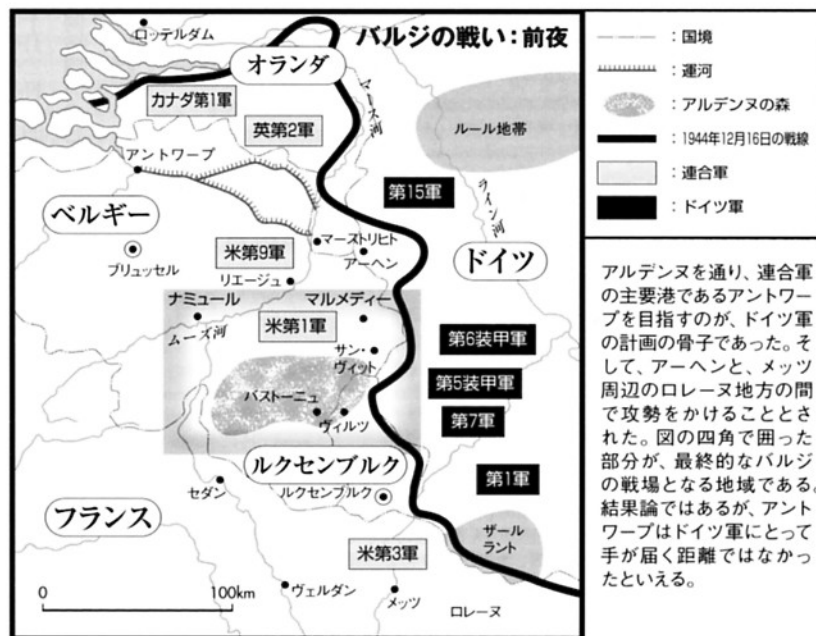
そして、アーヘンとロレーヌ地方の中間に広がるアルデンヌ地方は、九月中旬に米軍が占領してから約二か月の間、米独両軍とも積極的な活動を行うことなく対峙する状況が続いたため、いつしか米軍内では「幽霊戦線」と呼ばれるようになっていた。米軍はこの場所に、陸軍指定の「保養地」を二〇か所以上開設し、休暇中の米軍兵士はスポーツ施設や射撃場、映画館、みやげ物屋、温泉など各種の娯楽施設でひとときの愉しみを得ていた。

だが、その「幽霊戦線」の反対側では、ドイツ軍が大規模な攻勢作戦を実

行するための兵力の集中と補給物資の集積を活発に進めていた。捕虜の供述や押収した敵の文書、周辺の航空偵察写真、そして兵士に聞取する敵通信の傍受などの「状況証拠」に基づき、敵の意図をおおむね正確に見抜いた米第1軍司令部の情報参謀ベンジャミン・ディクソン大佐は、十二月十日付で以下のような内容の「情報分析報告書第37号」を提出した。

「フォン・ルントシュテット(独西方総軍司令官)は麾下の兵力を巧みに温存しており、敵はしかるべき時に、しかるべき場所、空軍、装甲兵力、歩兵、秘密兵器による集中的な反撃に出る能力を有している。ライン河西岸への継続的な兵力の集中は、ルントシュテットがこの反撃に全てを賭けようとしていることを物語っている。反撃の場所は、おそらくドイツが過去に幾度もフランス侵入の通路として使用したアルデンヌ近辺だろう」

ところが、連合軍の上層部はこの報告内容に疑問を呈し、アルデンヌの「幽霊戦線」の防備を強化する方策をとろうとはしなかった。その最も大きな理由は、解説された「ウルトラ情報」の出所である独軍上級司令部間の命令通



信には、アルデンヌでの敵の大反攻計画を示す具体的な作戦命令の類が全く含まれていなかったからである。

先に述べた通り、当時の連合軍は、敵情分析の多くを「ウルトラ情報」に依存しており、オランダでの「マールケット・ガーデン作戦」が失敗に終わっ

た後も、それ以外の情報に基づき分析を軽視する傾向は続いていた。イギリス軍は過去四年半、アメリカ軍の場合には二年半にわたり、この「ウルトラ情報」に依存して、北アフリカやイタリア、そしてフランスでの戦いを優位に進めた実績が存在していた。とりわけノルマンディ上陸直後の攻防戦では、ドイツ軍の上級司令部が発した命令をことごとく探知することに成功しており、米英連合軍は敵軍の意図を先手を打って挫く形で作戦を優位に進めることができた。

ドイツ軍上級司令部の具体的な命令内容を示す「ウルトラ情報」は、断片的な情報をつなぎ合わせて敵の意図を

探るという従来の地道な作業に較べれば、ほとんど分析の必要もないほどに完成された「結論」だといえた。そのため、連合軍の情報部は次第に、この出来合いの料理のような「手取り早い」情報収集の手段に依存するようになり、デイクソン大佐が行ったような堅実な情報分析の手法は軽視されるようになっていたのである。

だが、アルデンヌでの大反攻の準備段階において、ドイツ側は厳重な情報統制と広範囲の偽装工作を行っており、十一月五日には各種の偽装と機密保持の要領を規定した国防軍総司令部の命令書が、西方総軍参謀長ヴェストファル中将とB軍集団参謀長クレプス中將、それに空軍作戦参謀長クリスチャン中将に宛てて下達された。命令の伝達は、原則として「ウルトラ情報」の情報源である暗号通信ではなく、将校の運搬によるとされ、作戦内容を師団長に説明する際には「内容を絶対に口外しない」との誓約が命じられていた。

連合軍は、敵の第2SS装甲師団や第12SS装甲師団、装甲教導（パンツァー・レーア）師団などの精強部隊が、ライン河西岸地域を鉄道で輸送されていることを「ウルトラ情報」から探知

していたが、彼らの展開意図を把握することには失敗したため、兵力移送を単なる「国境防衛線の増強」と解釈していた。そして、ドイツ軍がアルデンヌで大規模な反撃に出ると予想したデイクソン大佐は、米第1軍司令部から「過労のせいで分析が悲観的になっている」と判断され、十二月十四日に四日間の休暇を与えられてパリへと出発した。

ドイツ軍の大反攻「ラインの守り作戦」が開始されたのは、その二日後のことだった。

「幽霊戦線」を守る米軍部隊

一九四四年十二月上旬の時点で、アルデンヌの「幽霊戦線」に配備されていた米軍部隊は、ミドルトン少将率いる第8軍団所属の四個師団（第4歩兵、第28歩兵、第106歩兵、第9機甲）と、ジェロウ少将の第5軍団に所属する二個師団（第2歩兵、第99歩兵）、および両軍団所属の第14、第102の二個騎兵グループと、七個独立工兵大隊だった。

しかし、これらの六個師団のうち、完全戦力と呼べるのは、ロバートソン中将の第2歩兵師団だけだった。バー

アルデンヌ1944



“幽霊戦線”の後方の町リージュのデパートで、故国の子供たちへのお土産のぬいぐるみを選ぶアメリカ軍兵士たち。「ウルトラ情報」を鷄呑みにしたアメリカ軍は、ドイツ軍の能力と意図を見誤り、将兵たちもクリスマス気分には酔いしれていた。

トン少将の第4歩兵師団とコート少将の第28歩兵師団は、前述の通りヒュルトゲン森林での激戦に参加して消耗した部隊で、未だ戦力回復の途上にあった。そして、ラウアー少将の第99歩兵師団は前月に一部の部隊が小規模な戦闘を経験しただけで、ジョーンズ少将の第106歩兵師団とレナード少将の第9機甲師団に至っては、まだ一度も

実戦を経験したことがない「新米（グリーン）師団」だった。

デヴァイン大佐の第14騎兵グループと、オブライエン中佐の第102騎兵グループは、ソ連軍のような乗馬騎兵部隊ではなく、M5軽戦車とM8グレイハウンド装甲車などを装備する完全機械化部隊だったが、敵の総攻撃を迎え撃てるだけの対戦車戦闘力や支援火力は持たず、その

実体は軍団の前方警戒を主任務とする軽装の偵察連隊に過ぎなかった。

第14騎兵グループは、戦闘序列では第106歩兵師団の指揮下に入っていたが、同師団を率いるジョーンズ少将は、敵との交戦時における両部隊の連携については、ほとんど何も研究していなかった。第一次世界大戦中に陸軍へと入隊したジョーンズ

ズは、同時期にヨーロッパで戦った経験を持つ部下の連隊長や副師団長と異なり、米本国で事務作業に従事していた人物で、凄惨な戦場を肌で知る機会を一度も持たないまま、現在の地位に就いていた。

そして、米本土の基地で新兵の訓練を行い、海外に展開する第一線師団へと補充兵を送り出す「予備軍」の部隊として、前年の一九四三年春に編成されたばかりの第106歩兵師団は、「金獅子（ゴールデン・ライオンズ）」という猛猛なニックネームとは裏腹に、その内容は練度の低い「寄せ集め部隊」に他ならなかった。

一九四四年の四月から八月にかけて、第106歩兵師団は英本土およびノルマンディに展開中の前線部隊に、計七二四七人（師団兵員の六割）の訓練済み兵士を「補充要員」として送り出していた。だが、前線での部隊不足を補

うために「予備軍」所属の師団までもが前線へと送られることが決まると、同師団の欠員を補うため、基礎的な軍事教練しか受けていない高射砲兵や沿岸砲兵、憲兵などが、急遽「埋め合わせ要員」として編入された。

十月二十日、アメリカから船で英本土に到着した第106歩兵師団は、十二月二日にフランスのル・アーヴル港に上陸し、十二月十日にアルデンヌへと到着した。緊張と不安の中でドイツ国境の最前線に到着した第106歩兵師団の将兵は、予想もしなかった「幽霊戦線」の平穏な空気に拍子抜けし、もしかしたら自分たちは一度も戦闘に参加せずに、このままドイツが敗北して戦争が終わるかもしれないという、淡い期待を心に抱き始めていた。

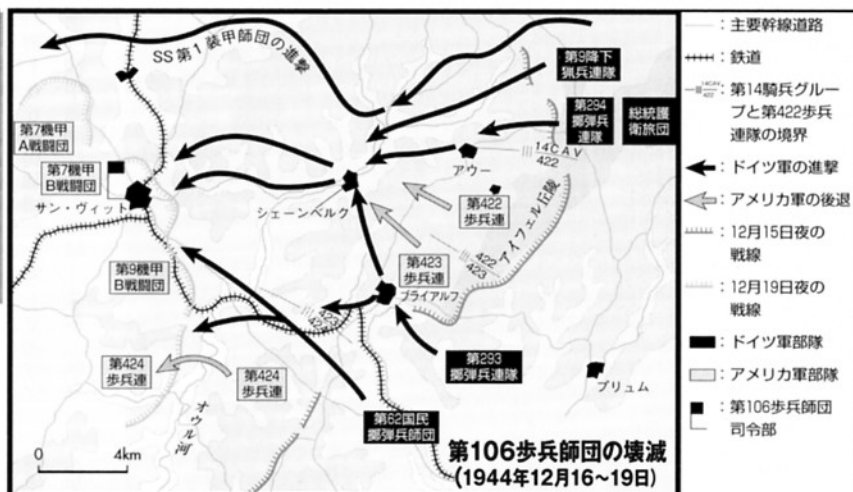
だが、彼らは間もなく、それが幻想に過ぎなかったことを痛感させられることになる。

戦略的奇襲による狼狽と混乱

壊滅した米第106歩兵師団

一九四四年十二月十六日の午前五時三〇分、アルデンヌ地方を縦断する一

三五キロほどの戦線で、ドイツ軍の猛烈な砲撃が開始され、山小屋で眠りについていたアメリカ兵は何が起こったのか把握する暇も与えられないまま、



第106歩兵師団は戦闘の経験がない「新米師団」だった。アイフェル丘陵のドイツ側前線に戦線を構築していた第422、第423両歩兵連隊の両側をドイツ軍部隊は通過、両連隊の後方にあるシェーンベルクで敵が合流したことによって、第106歩兵師団の2個連隊は包囲されることとなった。一方、第424歩兵連隊は一旦オウル河の後方に後退したが、ドイツ第62国民擲弾兵師団の攻撃によって戦線は崩壊し、ドイツ軍は師団司令部のあるサン・ヴィットに迫った。

域は、比較的防衛に適した地形だったが、しかし道路網はドイツ軍が米軍部隊の背後へと進出しやすい形で走っており、ドイツ軍の攻撃はその道路に沿う形で実行されていた。

ドイツ軍の第3降下猟兵師団第9降

激しい射撃戦に巻き込まれていた。

アルデンヌの「幽

電戦線」で、最も敵

陣の奥深くに突出

していたのは、オ

ウル河上流のロス

ハイム峡谷に展開

するデヴァイン大

佐の第14騎兵グル

ープで、さらに同

部隊の南隣りでは

第106歩兵師団

の第422、第4

23、第424の

三個歩兵連隊が、

ドイツ西部国境の

アイフェル丘陵に

沿って戦線を築い

ていた。ロスハイ

ム峡谷からアイフ

エル丘陵に至る地

域は、比較的防衛

に適した地形だっ

たが、しかし道路

網はドイツ軍が米

軍部隊の背後へと

進出しやすい形で

下猟兵連隊と、

第18国民擲弾兵

(歩兵)師団第2

94擲弾兵連隊、

そして総統護衛

旅団から分派さ

れた四両のケー

ニヒス・ティ

ガー戦車が投入

されたロスハイ

ム峡谷の攻撃正

面を、わずか一

個騎兵(装甲車)

中隊と一個対戦

車中隊で守っていた第14騎兵グル

ープは、瞬間に前線を破られて、西へと

敗走させられた。

デヴァイン大佐は、予期せぬ敵襲への

対応を協議するため、第106歩兵

師団司令部のあるサン・ヴィットへと

向かったが、実戦経験のない師団長ジ

ョーンズと参謀たちは、同師団が突如

として投げ込まれた危機的状況にどう

対処すればよいのか判断をせず、途

方に暮れてしまっていた。

第14騎兵グル

ープの守るロス



アルデンヌ攻勢におけるIII号突撃砲とドイツ軍兵士たち。油断していたアメリカ軍は、戦線に弱小部隊を薄くはりつけていたが、ドイツ軍はなかなかの装甲部隊と精鋭を大量に投入、緒戦においてアメリカ軍に大混乱を生じさせた。

側面と背後はがら空となり、同日正午頃には同連隊の後方約五キロのアウトという村がドイツ軍先遣部隊の手に落ちた。一方、キャヴェンダー大佐の第423歩兵連隊とリイド大佐の第424歩兵連隊の境界付近でも、第18国民擲弾兵師団第293擲弾兵連隊が米軍の前線を突破して、道路沿いにブライアルフ村へと突進し、午後三時頃から村の周囲で激しい戦闘が繰り広げられていた。

両翼を突破されたことで、第422と第423の二個歩兵連隊は包囲の危機に直面したが、この日の夕方に第8

アルデンヌ 1944



(上) 破壊されつつあるサン・ヴィットの町で戦闘を行うアメリカ兵。第106師団司令部があったサン・ヴィットは重要拠点であったが、最終的にドイツ軍の手に落ちることとなった。(左) サン・ヴィット周辺の陣地で迫撃砲で攻撃を行うアメリカ軍兵士。



軍団長ミドルトンから「第7機甲師団のB戦闘団が増援としてそちらに向かっている」と聞かされたジョーンズ少将は、この戦車部隊が到着するまで現状を維持しようと考え、各連隊に退却を命じる機会を逸してしまった。しかし実際には、クラーク准将率いる第7機甲師団B戦闘団は、いまだ戦場からはるか彼方のマーストリヒト附近を移

動中であり、彼らがすぐに第106歩兵師団を苦境から救い出すことは不可能だった。

十二月十七日の午前九時頃、ドイツ軍の第293擲弾兵連隊と第294擲弾兵連隊がシェーンベルクで出会い、第422と第423歩兵連隊の九〇〇〇人が包囲環に閉じこめられた。右翼の第424歩兵連隊は、第9機甲師団

B戦闘団のシャーマン戦車に支援されながら西へと退却したが、オウル河にかかる橋は他の二個連隊が包囲突破に成功した場合に備えて、翌十八日の昼まで爆破せずに残された。しかし、十二月十八日午前実施された第422と第423歩兵連隊の西への突破攻撃は、連携の不備からすぐに頓挫し、同日の深夜にはあろうことか両連隊が相手をドイツ軍と見誤って同士討ちをする悲惨な出来事も発生した。

ドイツ軍の圧力が強まる中で、手持ちの弾薬を使い果たした米軍二個連隊が、これ以上抵抗を続けられる見込みは皆無だった。第423歩兵連隊長キヤヴェンター大佐は、十二月十九日の午後三時四五分に連隊内の指揮官を集めて会議を開き、

苦渋の決断を下した。

「午後四時を以て敵に降伏する。各員、銃火器を破壊せよ」

カナダ系アメリカ人でフランス語を話せる第422歩兵連隊

長デシユノー大佐は、悔し涙を流しながら、やってきたドイツ軍の軍使にフランス語で降伏の意志を伝えた。

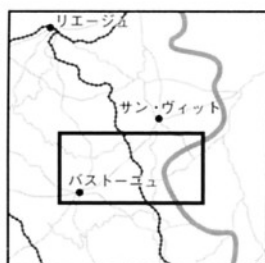
残った第424歩兵連隊は、ようやく到着した第7機甲師団B戦闘団と合流して、要衝サン・ヴィットの周辺に応急の防衛線を築いた。しかし、三日後にドイツ軍第62国民擲弾兵師団が南から防衛線に総攻撃をかけると、同連隊もまた大損害を受けて敗走させられた。

こうして、第106歩兵師団は十二月二十二日まで初陣を戦い、全兵員一万六〇〇〇人のうち、死傷者と降伏した捕虜の合計一万二〇〇〇人を喪失した。フランス上陸から二〇日、ドイツ軍の攻勢開始からわずか一週間、

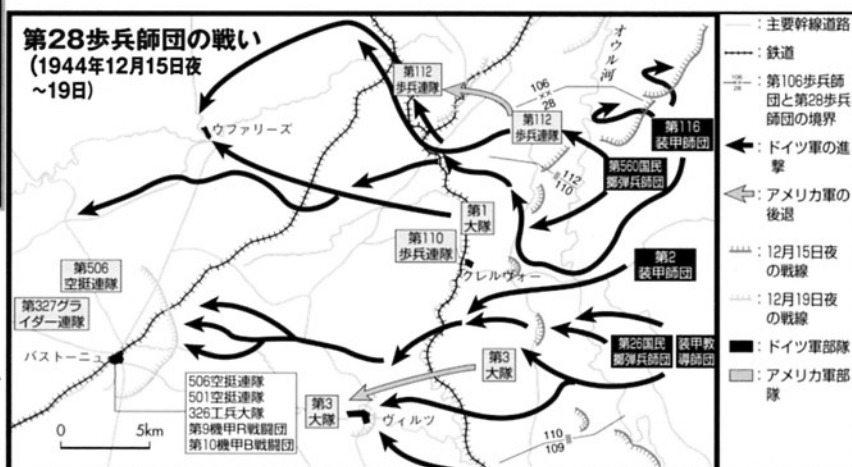
「金獅子」師団は壊滅したのである。

必死の抵抗を続ける米軍部隊

ロスハイム峡谷からアイフェル丘陵に至る前線の北と南でも、米軍の前線部隊はドイツ軍の猛攻に晒された。第424歩兵連隊の南隣では、第28歩兵師団の第112、第110、第109歩兵連隊が、オウル河に沿って北から南へと防衛線を形成していたが、その正面幅は約四五キロに達しており、ド



第28歩兵師団の担当正面はかなり広く、そこに兵力を薄く展開させていた。ドイツ軍は各連隊・大隊の間隙を突破し、電撃的に前進した。第28歩兵師団の後方には、幹線道路が集まる要衝バストーニュがあったことから、アメリカ軍は多くの部隊をバストーニュに集結させ、防衛に全力をあげた。



ドイツ軍はこの戦線に装甲師団三個（第2、第116、教導）と降下猟兵師団一個（第5）、擲弾兵師団二個の計六個師団を投入していた。

フラー大佐に率いられた第110歩兵連隊の担当区域では、十二月十六日の午前四時頃、ドイツ第26国民擲弾兵師団の歩兵が、密度の疎らな米軍の監視哨所をすり抜けて戦線の奥深くに浸透することに成功していた。そして、大地を揺さぶる砲撃の轟音が東の方角から響き渡る頃、ドイツ兵はオウル河の戦線から八キロ西方の米軍後方陣地に襲いかかった。

第110連隊所属の各防御陣地を結ぶ連絡用の電話線は、通過したドイツ軍部隊によってあちこちで切断されており、フラーは十六日の夜まで、連隊が置かれていた全般的状況を正確に把握することができなかった。しかし、ドイツ軍浸透部隊が迂回した米軍の抵抗拠点は、すぐに奇襲の混乱から立ち直って激しい防御射撃を開始したため、

ドイツ第26国民擲弾兵師団は西への前進をそれ以上続けられなくなった。ウィルツに設置されていた米第28歩兵師団の司令部では、師団長のコータ少将が各連隊からの断片的な報告を総合して、敵がオウル河を越えて総攻撃を開始したとの結論に達し、午前二時頃に第707戦車大隊を援軍として第110歩兵連隊の戦区に派遣する命令を下した。だが、予備部隊とされていたドイツ装甲教導師団がオウル河を渡河して前線に投入されると、ティーガー重戦車に太刀打ちできない米軍のシャーマン戦車は次々と撃破され、第110歩兵連隊は連隊本部が置かれていたクレルヴォーを十二月十七日に失い、西へと退却した。

一方、第110歩兵連隊の左に位置するネルソン大佐の第112歩兵連隊は、四〇両のパンター中戦車を有するドイツ

ドイツ第26国民擲弾兵師団は西への前進をそれ以上続けられなくなった。ウィルツに設置されていた米第28歩兵師団の司令部では、師団長のコータ少将が各連隊からの断片的な報告を総合して、敵がオウル河を越えて総攻撃を開始したとの結論に達し、午前二時頃に第707戦車大隊を援軍として第110歩兵連隊の戦区に派遣する命令を下した。だが、予備部隊とされていたドイツ装甲教導師団がオウル河を渡河して前線に投入されると、ティーガー重戦車に太刀打ちできない米軍のシャーマン戦車は次々と撃破され、第110歩兵連隊は連隊本部が置かれていたクレルヴォーを十二月十七日に失い、西へと退却した。

一方、第110歩兵連隊の左に位置するネルソン大佐の第112歩兵連隊は、四〇両のパンター中戦車を有するドイツ

第116装甲師団と第560国民擲弾兵師団第1130擲弾兵連隊の強襲を受けたが、連隊の担当正面幅が第110歩兵連隊の半分ほどであったこともあり、十二月十六日いっぱいオウル河沿いの防御陣地を保持することに成功した。しかし、弾薬の不足と、両翼を担う部隊の後退で包囲の危機に晒されたため、ネルソンは師団長に退却の許可を求め、これを受けたコータは十七日の午後四時頃に第112歩兵連

第116装甲師団と第560国民擲弾兵師団第1130擲弾兵連隊の強襲を受けたが、連隊の担当正面幅が第110歩兵連隊の半分ほどであったこともあり、十二月十六日いっぱいオウル河沿いの防御陣地を保持することに成功した。しかし、弾薬の不足と、両翼を担う部隊の後退で包囲の危機に晒されたため、ネルソンは師団長に退却の許可を求め、これを受けたコータは十七日の午後四時頃に第112歩兵連

第116装甲師団と第560国民擲弾兵師団第1130擲弾兵連隊の強襲を受けたが、連隊の担当正面幅が第110歩兵連隊の半分ほどであったこともあり、十二月十六日いっぱいオウル河沿いの防御陣地を保持することに成功した。しかし、弾薬の不足と、両翼を担う部隊の後退で包囲の危機に晒されたため、ネルソンは師団長に退却の許可を求め、これを受けたコータは十七日の午後四時頃に第112歩兵連



第28歩兵師団付きの軍楽隊や補給中隊の兵員が、包囲から逃れて来たところ。ウィルツを守るために急速、防衛部隊として編成され戦ったが、弾薬がなくなったため後退した。

アルデンヌ1944



撃破された第150装甲旅団のパンター戦車。偽装作戦向けにアメリカ軍のM10駆逐戦車に外観を改造されている。よく見ると砲塔側面にアメリカ軍の星マークも描かれている。ドイツ軍は、アメリカ軍を混乱させるため、「偽のアメリカ軍部隊」を投入した。

隊へ退却許可を出した。

さらにロスハイム峡谷の北では、第2と第99の二個歩兵師団が、モンシヤウからエルゼンボルンを経てロスハイムに至る二五キロの戦線で、ドイツ第6装甲軍の国民擲弾兵三個師団（第12、第277、第326）の突撃を迎え撃っていた。古都モンシヤウの東に配置され、十二月十三日から限定的な攻撃任務を行っていたロバートソン中将の第2歩兵師団は、ただちに防御に転じてモンシヤウとエルゼンボルンの周辺

に陣地を構築した。

だが、その南東部を担当する第99歩兵師団の戦区では、第106歩兵師団と同様の実戦経験の乏しさから即座に事態を把握できず、ドイツ軍の奇襲攻撃で一時的な混乱に陥ってしまう。右翼を担うライリー大佐の第394歩兵連隊所属のある部隊は、朝食配給の行列に並んでいるところをドイツ軍第12国民擲弾兵師団に襲われ、食器を銃に持ち替える間に多くの戦死者を出すこととなった。

一方、スコット中佐の第393歩兵連隊と、マッケンジー大佐の第395歩兵連隊も、敵の突撃で大きな損害を被ったが、第99歩兵師団の師団長ラウアー少将は、予め各連隊の担当区域で地雷原と鉄条網による防備を固めさせていたため、攻撃側のドイツ軍も多大な出血を強いられていた。

だが十二月十八日の午後六時、第5軍団司令官ジェロウ中將は、二日間の激戦で兵員数が激減した第99歩兵師団を、第2歩兵師団の

指揮下に編入する決定を下した。これにより、モンシヤウからエルゼンボルンに至る地域で米軍部隊の指揮系統は一本化され、経験豊富な第2歩兵師団長ロバートソンの下、より効率的な形で防御作戦を遂行できるようになった。

「偽装米兵」出現の衝撃

十二月十六日の夕方、アルデンヌでドイツ軍が攻撃に転じたらしいという第一報が、ヴェルサイユの連合軍最高司令部に届けられた。報告を読んだ米第12軍集団司令官ブラッドレー大將は、

この攻撃を米第3軍のザール方面への総攻撃を妨害する牽制ではないかと疑ったが、当面の措置として、第9軍所属の第7機甲師団と、第3軍所属の第10機甲師団を、それぞれ北と南からアルデンヌに向かわせるよう命令を下した。

ブラッドレーから電話を受けた第3軍司令官バットンは、ザール攻撃の第二波攻撃部隊に予定していたモリス少將の第10

機甲師団を引き抜かれたことに激怒して声を荒げた。しかし、カン高いバツトンの罵声を軽く聞き流したブラッドレーと最高司令官アイゼンハワーも、アルデンヌから届いた別の報告に目を通した瞬間、激しい動揺に襲われた。

その報告によると、アルデンヌの米軍支配地域でアメリカ軍の軍服を着用したドイツ兵が何人も捕らえられ、彼らの一人は尋問に対して自らの任務を「連合軍最高司令官アイゼンハワーの誘拐または暗殺である」と供述したのである。

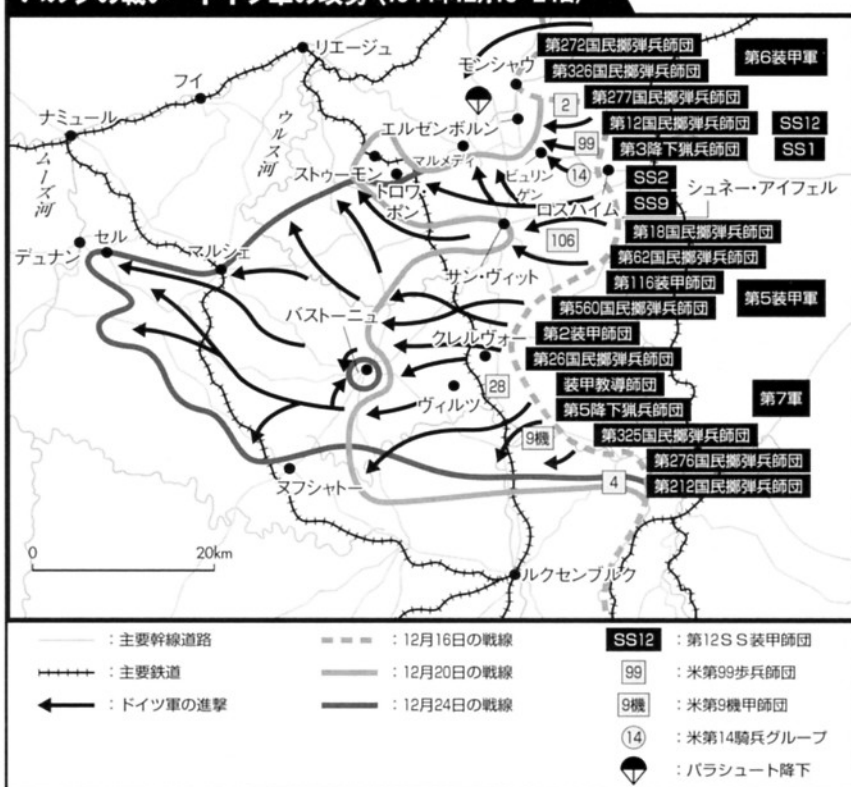


後方擾乱のためアメリカ軍兵士の軍服を着て活動し、捕虜となって銃殺に処せられるドイツ兵。ドイツ軍は敵後方を擾乱するグライフ作戦を実施したが、相手国の軍隊の戦闘服や徽章を意図的に着用して戦闘行為を行うのはハーグ陸戦条約違反であり、捕虜にはこうした過酷な運命が待っていた。

作戦開始から8日後、ドイツ軍はアメリカ軍の意表を突いて前進、大きな突出部（バルジ）が形成された。だが、ただか40～50kmほど進んだだけで燃料が底をつき始めた。このほか、前進速度が振るわなかった理由として、期待された第6装甲軍がほとんど前進できなかったこと、混乱状態に置かれながらも各所でアメリカ軍兵士が粘り強く抵抗したことが挙げられる。

アルデンヌスでの大攻勢「ラインの守り作戦」開始に先立ち、ドイツ軍は英語の会話能力を持つ兵士を選抜して米軍の制服を着用させ、敵陣に送り込んで後方を攪乱させるという秘密作戦（グライフ作戦）の準備を進めていた。

バルジの戦い—ドイツ軍の攻勢（1944年12月16～24日）



この作戦を遂行するため、数々の特殊作戦を成功させて勇名を轟かせたSS中佐オットー・スコルツェニーを総責任者とする「偽装米軍部隊」は、捕獲した米軍車両を装備した二個大隊から成る第150装甲旅団と、ジーブ一両単位の小グループで米軍後方部隊に紛れ込み、道標を間違った方向に変えたり、各部隊の指揮官に偽の命令を出したりして行動を混乱させる「シュテイーラウ戦隊（ES）」の二種類の部隊で構成されていた。

後者の「偽装米兵」は、シュテイーラウSS大尉を長とする総勢一五〇人の志願兵部隊だったが、十二月十六日から十九日までに米軍後方へと実際に送り込まれたのは、四人ことこのグループが一隊の計四人だけだった。そして、十二月十七日に捕らえられた同隊員の一人が、実際には存在しない「アイゼンハワー誘拐/暗殺計画」をまことしやかに供述したことで、連合軍の組織内部に大きな波紋が沸き起こることとなったのである。

一見すると荒唐無稽と思われる敵将の誘拐計画を、連合軍側が真面目に警戒したのは理由があった。三年前の一九四一年秋、イギリスは北アフリカ

の戦場で独伊両軍を率いるカリスマ的な知将エルヴィン・ロンメルを誘拐または暗殺するという同種の計画を立案しただけでなく、英陸軍特殊部隊のレイコック大佐を指揮官とする襲撃部隊を実際にリビアへと送り込んで、同年十一月十七日にこの作戦を執行していたからである（結果は失敗）。

シュテイーラウ戦隊が実行した工作に直接起因する米軍後方の混乱は、実際にはごくわずかであったともいわれているが、彼らの存在と活動内容が米軍将兵に与えた心理的效果は絶大だった。「偽装米兵」を見破るための誰何（だれいか）を口実に、階級が上の将校を尋問攻めにするなどの他愛ない鬱憤晴らしをする者も多かったが、最前線から敗走した米兵の中には深刻な疑心暗鬼に陥り、捕獲したドイツ軍の装備品をたまたま身につけていた本物のアメリカ兵を「偽装米兵」と誤認して射殺するという悲劇的な事件もいくつか発生していた。

そして、連合軍の欧州最高司令官アイゼンハワーはしばらくの間、保安上の理由から行動の自由を著しく制約され、不愉快な生活を強いられることになったのである。

アルデンヌ1944

バスターニーニ包囲陣の抵抗

非力な米軍工兵部隊の奮闘

「バルジの戦い」の初期段階において、米軍の戦線崩壊を食い止める上で重要な役割を果たしたのが、各地に分散配置されていた工兵部隊だった。防壁地の構築や架橋などの土木工事を主任務とする彼らは、当然のことながら火砲や戦車などの重装備を全く持たず、ドイツ軍のケーニヒス・ティーガー重戦車に対抗する術は皆無だったが、それでも工兵隊員ならではの「創意工夫の才」を発揮して、敵の意図を挫く工作を各地で実行した。

戦線北部の第5軍団戦区の後方では、第99歩兵師団と第106歩兵師団の間隙部を突破したドイツ軍第1SS装甲師団のバイパー戦闘団が、攻勢二日目の十二月十七日の朝にエルゼンボルン南方のビューリゲンという街にあった米軍の燃料集積所を急襲し、捕獲した五万ガロン（約190千リットル）のガソリンを自軍の戦車やトラックに給油した後、再び西への進撃を続けていた。これを知ったイエーッ少佐の第51戦闘工兵大隊は、彼らの

行く手にある重要な渡河点の村、その名も「トロワ・ボン（三つの橋）」でアンブレウ河とサルム河に架かる三か所の橋に爆薬を設置し、十二月十八日の昼前頃に全てを爆破した。

進撃予定路の橋を目前で落とされたことで、バイパー戦闘団はアンブレウ河を南西へ渡河する代わりに、進路を北西へと変針せざるを得なくなったが、この工兵隊の行動は、敵を森林の袋小路へと誘導する結果となる。十二月十九日、バイパー戦闘団はトロワ・ボンから七キロ北西にあるストゥーモンまで進出したが、米軍は敵の突破を阻むため、ホップス少将の第30歩兵師団とギャヴィン少将の第82空挺師団をこの戦域に派遣した。

十二月二十一日から二十三日にかけて、ストゥーモン周辺では壮絶な攻防戦が繰り広げられたが、兵員数に勝る米軍がバイパー戦闘団の背後を脅かし始めると、指揮官のバイパーSS中佐はもはやこれ以上の西進は不可能と判断して装備戦車の放棄を決断し、十二月二十三日の夜に生き残りの兵士十八〇

〇人を連れて、南東の方角へと脱出した。

バイパー戦闘団の右翼では、スコルツェニーSS中佐率いる「偽装米軍戦車隊」の第150装甲旅団

がマルメディに進出するのを阻止すべく、バークリン大佐の第291戦闘工兵大隊が先回りして手近な資材で市内の道路に障害物を設置し、ワルヒエ河に架かる橋には大量の爆薬を仕掛けていた。そして十二月二十二日午後この橋を崩落させ、敵の戦車部隊がマルメディを通過して第5軍団の背後へと進出するという重大な脅威を取り除いた。

第150装甲旅団の進出

予定地では、フォン・デア・ハイテ大佐に率いられたドイツ軍降下猟兵約一五〇人が味方戦車の到着を待ち続けていたが、バラシエートで降下した後、モンシャウ西方の森で孤立無援となった彼らは、作戦の前途を悲観して米軍に降伏した。



厳寒の中、ドイツ軍歩兵の前進を妨害するために有利鉄線を敷設するアメリカ軍工兵部隊。ドイツ兵が有利鉄線を切断したときに爆発するよう、爆薬を取り付けることも行われた。こうした工兵部隊の地道な活動が、ドイツ軍の前進を大きく阻むこととなった。

マルメディとクレルヴォーの中間に位置する交通の要所サン・ヴィットでは、リックス中佐の第81戦闘工兵大隊が、ハスブルック准将の第7機甲師団

と協力して十二月十七日から同市の防衛戦に参加し、十二月二十一日まで拠点をもちこたえた。本来は後方部隊であるにもかかわらず、工兵たちは健闘し、リッグス自身も最後には捕虜となつて捕らえられたが、当初の予定では攻勢開始二日目に攻略する予定だったサン・ヴィットの制圧に六日間を費やしたことで、ドイツ軍の攻勢計画は根本から見直しを迫られることとなった。

南部の戦線では、キエルドセス中佐の第44戦闘工兵大隊に所属する約六〇〇人の工兵がバストーニュ東部のヴィルツに防御陣地を構築し、第28歩兵師団と第707戦車大隊のわずかな残存部隊と共に防戦を展開。ドイツ軍第26国民擲弾兵師団と第5降下猟兵師団の進撃を、十二月十七日から十九日の夜まで三日間にわたって停止させる役割を果たしていた。

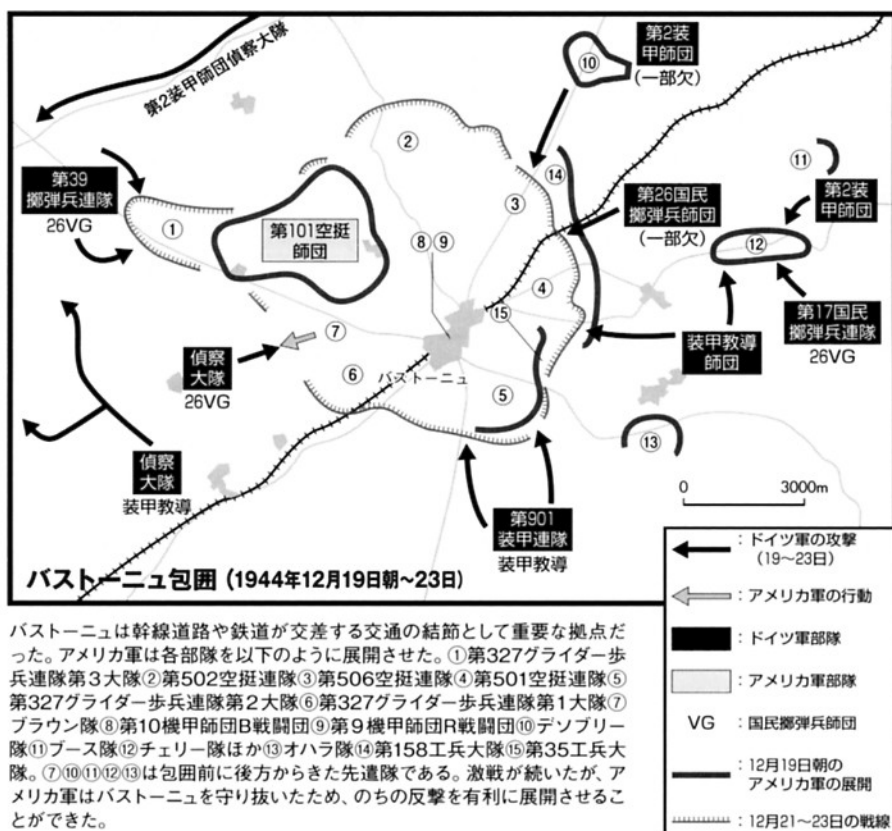
要衝バストーニュの孤立

これらの工兵部隊が、必死の遅滞戦術で時間を稼いでいる間に、米軍は増援の歩兵師団や機甲師団を各地の拠点に送り込み、緒戦で綻びた戦線の両端を素早く繕うことができた。だが、サン・ヴィットとバストーニュの中間地

点に穿たれた戦線中央の空白地帯では、ドイツ軍の三個装甲師団（第2、第116、教導）が無人の林道を西へと疾駆し続けており、アルデンスの戦況は依然として米軍に不利な方向へと傾いていた。

第一次大戦の激戦地ヴェルダンで十二月十九日に開かれた戦略会議において、ドイツ軍のアルデンスでの攻撃が単なる牽制行動ではなく、戦略的企図に基づく大攻勢であることをようやく確信したアイゼンハワーは、ドイツ軍の突進によって形成されつつある戦線の「突出部（バルジ）」の両側面で大規模な反撃を行うことを決定し、その第一段階としてバストーニュ附近の南側面での攻撃を実施するよう、第3軍司令官パットンに命令した。

また、突出部の北側と南側では連絡が困難なため、北側面の米軍部隊を一時的にモントゴメリーの英第21軍集団へと移管し、ブラッドレーの第12軍集団は南側面の米第3軍と元第1軍の第5軍団を指揮することとなった。第1軍司令官ホッジスをはじめ、米軍指揮官の多くは、偏屈者で無愛想なモントゴメリーの指揮下に入るのを嫌がったが、アイゼンハワーは英第21軍集団を



関与させれば、イギリス軍の増援も期待できると見込んでいた。

攻撃命令を受けたパットンは、ただちに第4機甲師団と第26歩兵師団、第80歩兵師団を、第3軍からの援軍第二

陣としてバストーニュに差し向ける準備を開始した。だが、七本の舗装道路と三本の鉄道路線が交差する要衝バストーニュでは、一足先に派遣されていたロバート大佐の第10機甲師団B戦闘団



上空から見たバストーニュの町の一部。恐らく解放されたあとに撮影されたものだろうが、破壊された建物、雪原に残された車両の轍、ところどころに残る黒い焼け跡や汚れなど、戦闘の痕跡が確認できる。

と、師団長代理マッコリフ准将（正師団長のティラー少将はペンタゴンでの会議に出席するため一時帰国していた）に率いられた第101空挺師団、テンペルトン中佐の第705対戦車大隊、および第35と第158の二個戦闘工兵大隊が、ドイツ軍の第2装甲師団

と装甲教導師団との間で熾烈な攻防戦を繰り広げていた。

バストーニュの外郭陣地に対する攻撃が開始されたのは、十二月十九日朝のことだった。それから九二日間、両軍は互いに凄まじい損害を出しながら、米軍の陣地を巡って一進一退の激闘を

繰り広げた。翌十二月二十日の夜、ドイツ軍装甲教導師団の第901装甲連隊は、バストーニュから南へと通じる道路の封鎖に成功し、米軍の守備隊は半径約五キロのいびつな包囲環の中へと閉じこめられてしまった。

翌朝から十二月二十二日まで、ドイツ軍は総攻撃の準備を進めるために戦闘を停止したが、マッコリフはこの天からの授かり物のような貴重な時間をフルに活用して、各部隊に全周陣地の構築を行わせた。最も庄力の大きい東正面には、ユエル中佐の第501空挺連隊が展開し、北東にはシンク大佐の第506空挺連隊、北にはチャップイス中佐の第502空挺連隊が布陣。深い森が広がる南と西には、ハーバー大佐の第327グライダー歩兵連隊と第101空挺師団所属の第326工兵大隊が配置され、第9機甲師団R戦闘団の生き残り、第10機甲師団B戦闘団、第705対戦車大隊は予備として包囲環の内部に配置された。

「降伏だど？ たわけ！」

クリスマス前三日後に控えた十二月二十二日の昼頃、白旗を掲げた四人のドイツ兵が、米軍守備隊の司令官との

面会を求めて、米軍陣地に姿を現した。リーダー格の少佐が、タイプ打ちした最後通牒を手渡したが、その内容は次のようなものだった。

「戦いの行方は既に決した。この町に包囲されたアメリカ兵を救う道はただ一つ、名誉ある降伏のみである」

この文面を一読したマッコリフは、思わず「たわけが！」と口走って床に投げ捨てたが、敵の軍使に何と返答するか師団の参謀たちと相談するうち、その言葉を使うのがいいたろうとの結論で皆の意見が一致し、タイプライターで一枚の白い紙にこう打たせた。

「ドイツ軍司令官へ

たわけ！（Nuts!）

アメリカ軍司令官より」

ドイツ軍の軍使は、最初この英語の俗語を理解できず、これはどういう意味かと尋ねたが、米軍側の堂々とした態度を見て真意を悟り、すぐに味方の戦線へと引き返した。

十二月二十三日の朝、アルデンヌでは気温が零下二度まで下がり、視界が回復して空が晴れたため、米軍は弾薬や食糧などの詰まった補給物資のコンテナ一四四六箱を、包囲環の内部にバラシユートで投下することができた。



包囲され風前の灯火ともいえる状態のバストーニュに対して、補給物資を空中投下するアメリカ軍の輸送機群。アメリカ軍にとってこの町は、こうした空中投下を強行してでも確保する価値があるものであった。

しかし、急激な寒波による地面の凍結は、ドイツ軍の攻撃部隊の移動と展開を容易にするという、米軍に不利な効果をもたらしていた。

敵情の偵察を慎重に行い、米軍陣地は北西と南西の正面で手薄であることを見抜いたドイツ軍は、第26国民擲弾兵師団をこの正面に投入して、同日の

夕方から総攻撃を実施させた。同じ頃、包囲環の東と南でも、装甲教導師団の戦車部隊による大規模な攻撃が開始され、米軍は予備部隊の第10機甲師団B戦闘団を南部に投入して必死の防戦を続けたが、前線の陣地を維持することはできなかった。敵の突撃で一部の防衛拠点が失われると、米軍の守備隊は完全な壊滅を回避するため、東西の両正面でじりじりと後退を余儀なくされ、バストーニュ包囲環は南北六キロ、東西三キロほどの歪んだ楕円形に変形させられた。

十二月二十四日、ドイツ軍は新手として第15装甲擲弾兵師団をバストーニュ包囲環の西側に送り込み、その日の夜にはドイツ空軍の戦闘爆撃機が現れて、米軍守備隊の頭上に爆弾の雨を降らせた。そして、十二月二十五日の午

前二時四五分、ドイツ軍の猛烈な準備砲撃が始まると、米軍守備隊の有線通信網はすたすたとに分断され、午前四時には白い迷彩外套を着たドイツ兵が、米軍の防衛陣地への突撃を開始した。

一七両の戦車に支援されて米軍の前線を突破した第15装甲擲弾兵師団第115装甲擲弾兵連隊の一部は、バストーニュ市街の一手前まで一気に突進し、守備隊司令官マッコリフが指揮を執る第101空挺師団の司令部まで約一・六キロの地点に迫った。だが、酷寒の中で第一次大戦型の肉弾突撃を繰り返すドイツ側の人的損害も甚大で、バストーニュを巡るクリスマススの攻防戦は、辛うじて立っているダウン寸前のボクサー同士が最後の力を振り絞って弱いパンチを応酬する、壮絶な殴り合いの様相を呈していた。

失敗に終わった「最後の賭け」

バストーニュ救援作戦

バストーニュ包囲環の南方では、パットン第3軍に所属する三個師団が、十二月二十二日に予定どおり北への進

撃を開始していた。だが、彼らの行く手には、「バルジ」の南側面を防御する第5降下猟兵師団が築いた頑強な縦深陣地が横たわっており、ギャフエイ少将の第4機甲師団は予想を上回る抵

アルデンヌ 1944

抗に遭遇して、十二月二十三日にはわずか三キロほどしか前進できていなかった。

十二月二十四日、状況打開の策を検討したギヤフエイは、エイブラムス中佐の第4機甲師団R戦闘団を、敵の防備が固い幹線道路の正面から、それよりも攻めやすい西側の森林へと振り向ける命令を下した。そして十二月二十五日、後続のマクブライド少将率いる第80歩兵師団から兵力の増強を受けた第4機甲師団の三個戦闘団が、戦闘爆撃機による猛烈な火力支援を受けながら幅広い正面で一斉攻撃を開始すると、攻勢作戦開始から連日の激戦で疲弊し切った第5降下猟兵師団の防衛線は、西から崩れ始めた。

シャーマン戦車二〇両と兵員二三〇人から成る第4機甲師団R戦闘団は、翌十二月二十六日早朝から北を目指して破竹の進撃を行い、その先遣部隊は同日午後五時前頃、ついに南西の方向から敵の包囲環を破ってバストーニュの米軍陣地に到達し、それから三〇分もしないうちに、救援部隊の指揮官エイブラムスとマッコリフは固い握手を交わした。

このエイブラムスは、後にベトナム

戦争の米軍司令官や陸軍参謀総長を歴任することになるが、現在の米軍主力戦車の名称「M1エイブラムス」も彼に因んだ命名である。

第4機甲師団R戦闘団の後続部隊は、粘り強く抵抗を続ける第5降下猟兵師団の反撃で大きな損害を被ったが、ドイツ軍はエイブラムスの戦闘団が切り開いた血路を塞ぐことができなかった。第一陣として第3軍から派遣された七〇両の救急車が市内に入り、バストーニュ守備隊の一〇〇〇人近い負傷者を、安全な後方地帯の野戦病院へと急いで搬送した。

遠すぎたムーズ河

一方、バストーニュの米軍守備隊は死闘を続けていたのと同じ頃、そこから西北西に約六〇キロの場所に位置するセルという町の附近では、ドイツ軍突破兵力の最先頭を進む第2装甲師団と、それを迎え撃つアメリカ軍第2機甲師団の間で、「バルジの戦い」におけるクライマックスともいべき壮絶な戦車戦が繰り広げられていた。

十二月二十二日にバストーニュの攻囲から離脱して、西への進撃を再開していたドイツ第2装甲師団の先遣隊は、

十二月二十四日にムーズ河の手前約一〇キロのセルに到達していた。ドイツ国境の攻勢発起点から最終目標のアントワープに至る進撃予定路の、ほぼ中間を流れるムーズ河の渡河は、アルデンヌ攻勢における最低限の作戦目標だったが、同師団はバストーニュ附近にいた十二月二十日頃から断続的な燃料不足に苦しみられており、セルに到達するのと同時に進撃を停止して、補給部隊の到着を待ち続けていた。

偵察部隊の報告を通じてこの敵情を察知した第2機甲師団の師団長ハーモン少将は、十二月二十四日の昼過ぎ頃、第7軍団司令官コリンズ少将に電話をかけ、敵の第2装甲師団を攻撃する許可を求めた。本来なら、形式上の上官である英軍人モントゴメリーの判断を仰がなくてはならなかったが、コ

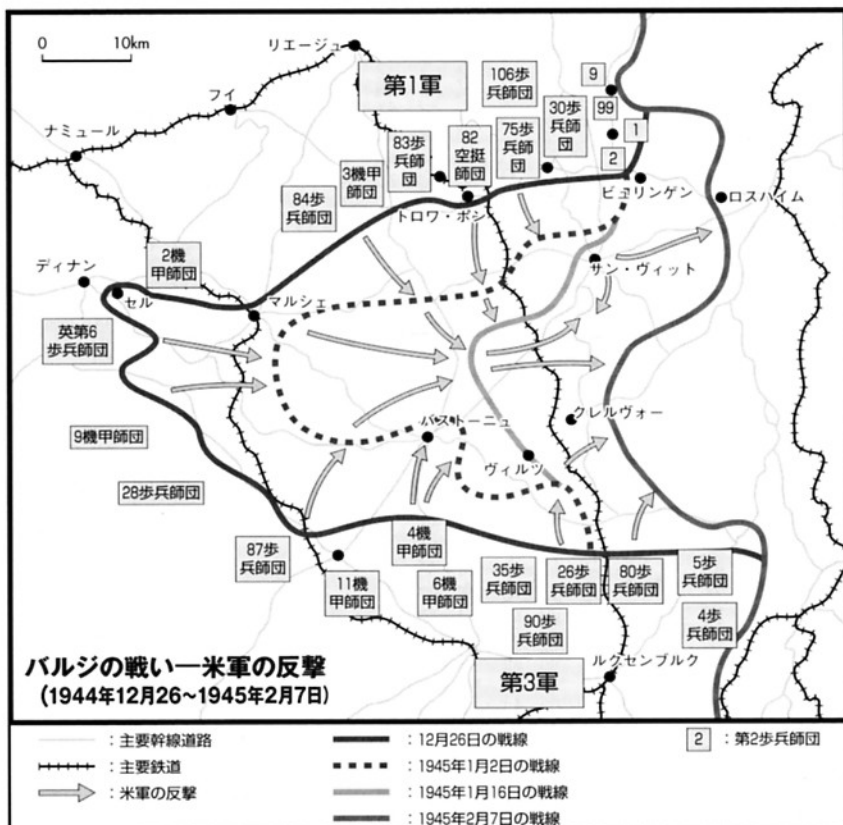
リンズは独断で命令を下した。「攻撃を許可する」

十二月二十五日、戦闘爆撃機の支援を受けたハーモン少将の第2機甲師団は、燃料が欠乏して身動きのとれなくなったドイツ第2装甲師団に情け容赦なく襲いかかり、戦車八二両と火砲八三門、各種車両四四一両を捕獲または破壊し、一二〇〇人を超えるドイツ軍



窪地から状況を確認するドイツ軍将校と兵士。12月22日に撮影されたもので、この2日後、ドイツ軍はアルデンヌ作戦における最大進出地点であるセルの近郊に到達した。

セルまで到達したドイツ軍だったが、燃料の欠乏や、頼みの綱の第6装甲軍の前進が停滞したことなどもあり、反撃態勢を整えた連合軍によって撃退されることとなった。アメリカ軍はイギリス軍の第21軍集団の支援も得て攻勢に出た。パットンの第3軍に所属する第4機甲師団は包囲されたバストーニュを解放、以後連合軍は西と南北から巨大なバルジを締め上げていった。



将兵を捕虜にした。壊滅した第2装甲師団の生き残りは、後続の第116装甲師団と装甲教導師団に辛うじて助けられ、彼らと共に東の方角へ退却を開始した。

この敗北により、ドイツ軍が行った

最後の賭けであるアルデンス攻勢は、成功の望みを粉々に砕かれてしまった。

十二月二十六日、西方総軍司令官ルントシュテットとB軍集団司令官モーデル、および第5装甲軍司令官マンントイフェルは、それぞれ総統ヒトラーにほぼ同内容の報告を伝えた。

「攻勢の戦略目標であるアントワープへの到達は不可能」

この報告に激怒したヒトラーは、一九四二年の東部戦線でカフカス侵攻の失敗が明白となった時、第6軍にスタ

ーリングラード市の完全制圧を命じたのと同様、到達が絶望視されたアントワープに代わる実現可能な作戦目標として「バスターニュの占領」に着目し、使用可能な全ての兵力をこの戦域に投入するよう命じた。十二月二十八日、

ドイツ軍は第1SS装甲師団と総統護衛旅団、第3装甲擲弾兵師団をバスターニュ攻撃部隊に編入し、一九四五年一月一日には第9SS装甲師団と第12SS装甲師団、第167国民擲弾兵師団、第340国民擲弾兵師団にもバスターニュへ向かうよう命令が下された。

一月二日の夜から開始されたドイツ軍のバスターニュに対する総攻撃は、

前年のクリスマスを上回る規模で実施

された。しかし、米軍もクロウ少将の

第6機甲師団とキルブルン准将の第11機甲師団、バーデ少将の第35歩兵師団などの増援を送り込んで必死に防戦し、第101空挺師団は最後までバスターニュを死守し続けた。そして、一月三日に「バルジ」の北側面から米第1軍の大反撃が始されると、ドイツ軍は包囲の危機から脱するためにバスターニュ攻撃を中止し、進撃してきた道を通

って東への撤退を開始したのである。

「バルジの戦い」が物語るもの

一九四五年一月二十八日、戦線の「バルジ」が消滅して両軍の動きが停止した時、この戦いにおけるアメリカ軍の損害は、戦死者一万人、行方不明者二万三〇〇〇人、負傷者四万七〇〇〇人の計八万人に達していた。ドイツ軍もまた、概算で一〇万人近い死傷者を出したが、終戦も目前と考えていた米軍にとっては、全く予想もなかった大損害だった。

最終的には勝利を収めたとはいえ、「バルジの戦い」の緒戦における米軍の敗北は、軍事組織としてのアメリカ軍の「若さ」をさまざまな面で露呈し

た出来事といえた。合衆国政府の孤立主義政策（モンロー・ドクトリン）により、米軍は二十世紀前半の対外戦争にほとんど関与しておらず、第一次世界大戦には「助っ人」として途中から参戦したものの、第二次世界大戦が勃発した時点で陸軍正規部隊の数は、わずか八個師団に過ぎなかった。

そして、一九四三年二月に初めて欧州・地中海戦域で実戦に参加して以来、米軍は百戦錬磨のドイツ軍と戦いながら、ヨーロッパにおける最新の戦闘技術と素早く習得していった。だが、十九世紀の南北戦争を最後に、外的脅威のない平和な米本土で召集されたばかりの兵士は、凄惨で無慈悲な近代戦の実像を知る機会がなく、他国の新兵よりも敵を甘く見る傾向が強かった。

当時も今も、アメリカ軍の伝統的な特徴としてまず挙げられるのは、前線部隊の運用法から、使用する兵器の設計、さらには後方支援組織の整備に至るまでの、総合的な「合理主義」であり、豊富な人的・物的資源を最大限の効率で活用する彼らの方法論は、ヨーロッパでも太平洋でも戦争遂行上の「経験不足」を十分に補う役割を果たしていた。

しかしその一方で、無駄と思われる箇所を取り除き、型にはまったパターンを多用する「合理主義」は、想定から逸脱した事態に直面した際に有効な対応策を見出せず、彼らの弱点である「若さ」や「経験不足」をさらに深めてしまう危険もはらんでいた。

敵軍意図の分析における「ウルトラ情報」の偏重などは、そうした「合理主義」が招いた弊害の一つである。人件費の節約という観点から新聞・雑誌等の公開情報の分析部門を縮小し、代わりにコストのかからない「エリント（電子情報）」への過度の依存に陥りつつある現代の各国情報機関もまた、同様の問題に直面していると伝えられている。

いずれにせよ、米軍が「バルジの戦い」の緒戦で大敗北を喫し、わずか半月とはいえ西部戦線の戦略的主導権をドイツ軍に奪われたことは、連合国首脳の間ですでに摩擦の種となっていた。「第二次世界大戦の終わらせ方」にも、多大な影響を及ぼすこととなった。

もし米第12軍集団司令官ブラッドレーが、アルデンヌ地方の地形効果や敵の作戦遂行能力を過小評価せず、戦闘未経験の師団に広大な戦線を薄く守ら

せる代わりに、一定レベルの戦闘能力を持つ師団で縦深の戦線を構築していたなら、あるいは史実のような苦戦を強いられることなくドイツ本国への攻勢を再開でき、戦後のヨーロッパを分断することになる「鉄のカーテン」の位置が、もう少し東寄りになっていたかもしれないのである。



12月28日、バスターニュの解囲後の第101空挺師団の兵士たち。足取りも重く、その疲れ切った表情から包囲下における激戦が偲ばれる。バルジの戦いにおける勝利は、劣勢の中でも戦い続けた兵士たちの奮闘がもたらしたものであったが、情報の収集と分析の努力を怠ったツケは、予想以上に大きなものであった。